

専門研修プログラム名	藍野病院	専門研修プログラム
基幹施設名	医療法人恒昭会 藍野病院	
プログラム統括責任者	円谷 邦泰	

専門研修プログラムの概要

本プログラムにおいて、基幹病院は医療法人恒昭会藍野病院が基幹病院となる。本プログラムの構成病院は藍野病院、藍野花園病院、青葉丘病院の3病院からなり、藍野病院は①“病める人々を医やすばかりでなく慰めるために”の精神に則り、患者中心の医療と看護を実践する。②精神と身体両面からのチーム医療に努め、良質の医療を提供し、地域医療に貢献する。③高齢者医療の総合的な診療体制を確立し、地域医療に貢献する。をモットーとしている。1年目は協力病院である藍野花園病院にて研修を行う予定である。藍野花園病院は単科精神病院であり、精神科指定病床を有し、措置症例も経験可能である。またクロザピン使用の難治性統合失調症症例を経験することも可能である。1年目の研修にて一般的な精神疾患症例を経験し、地域支援や地域移行に関して経験することを目指す。また実際の症例を通して、「面接法」「診断」「家族関係への配慮」「治療計画」「薬物療法」「精神療法」などの精神科の基本を学ぶ予定である。2年目は基幹病院である藍野病院にて研修を行う。藍野病院は18診療科（歯科を含む）を擁した919床のケアミックス病院であり、その内323床が精神病床である関西圏でも希少な総合病院である。身体合併症を有する精神疾患（認知症を含む）の症例、症状性精神障害、器質性精神障害などを経験することができる。また240床の認知症治療病棟を有しており、認知症の診断・治療を経験・学習可能である。さらに修正型電気けいれん療法を行っており、薬物療法以外の精神科治療を経験することも可能である。2年目の研修にて、他科との連携を経験し、総合病院勤務での精神科スキルを身につけることを目指す。3年目の研修は個々の研修医の将来ビジョンを尊重し、藍野花園病院、藍野病院、青葉丘病院での研修が選択可能である。これら3年の研修にて、単科精神病院から総合病院精神科まで医療機関を問わず幅広く勤務できるスキルを持った臨床精神科医を養成することが本プログラムの目的、使命である。

専門研修はどのようにおこなわれるのか

当初の1年間は藍野花園病院にて単科精神病院での入院治療の経験・研修を行う。具体的には指導医とともに入院症例などを初診から担当、経験する。ここでは非自発的入院も経験し、精神保健福祉法や関連法規に関する基礎知識を学習する。症例検討会にて症例のプレゼンテーションを行い、精神医学用語の使用法、病態と診断過程、診断基準及び治療計画策定などへの理解を深める。また抄読会では、EBM（Evidence-Based Medicine）に重点を置いた指導、教育を行っている。2年目は藍野病院にてリエゾン・コンサルテーション、身体合併症症例（アルコール・薬物依存症症例などを含む）および小児発達外来における児童精神医学などを学習する。他科と協働することで、チーム医療におけるコミュニケーション能力や総合病院精神科で必要とされるスキルを養う。また「物忘れ外来」や「認知症治療病棟」での症例を通じて、認知症の診断、治療などを学習する。3年目以降は指導医のスーパーバイズを受けながら自らが主治医となって、主体性、責任を持った医療を遂行する能力を養う。また多職種で構成されるチーム医療の中心メンバーとして活躍する能力を培う。Aコースでは基幹病院である藍野病院、Bコースでは藍野花園病院、Cコースでは青葉丘病院にて研修を行う。青葉丘病院は、北摂に位置する藍野病院から直線距離で約40kmはなれた田園風景の残る大阪狭山市にあり、精神病床（精神科指定病床を含む）、一般病床（内科中心）、療養病棟を有する病院である。そのためバランスよく精神科臨床経験を積むことが期待できる。以上とは別に、3年間を通じて日本精神神経学会の学術集会や各種研修会へ積極的に参加を促し、少なくとも一度は学術的な発表を行うことを推奨している。

専攻医の到達目標	修得すべき知識・技能・態度など	専攻医は精神科専門研修マニュアルに従って学習していくことになる。当プログラムでは「単科精神病院から総合病院精神科まで医療機関を問わず幅広く勤務できるスキルを持った臨床精神科医を養成すること」を目標としており、臨床医としての基本的能力を習得することに重点を置く。具体的には患者及び家族との面接技法などを習得し、良好な治療関係を維持する能力を身につける。疾患概念に沿った病態の理解を深め、適切な診断と治療計画の立案策定を行い、それを実施する。またチーム医療の中核として主体性を持って治療に取り組む姿勢を習得する。非自発的入院などの治療を介して、精神保健福祉法の理解を深め、人権保護の在り方、精神医学の在り方を常に考え続け、社会情勢及び法律に即した精神医学を実践する能力を身につけることを目標としたい
	各種カンファレンスなどによる知識・技能の習得	臨床現場では指導医、上級医と密に連携、相談を行い、円滑な治療および職場での人間関係の構築を行う。リエゾン・コンサルテーション及び身体合併症症例では他科医師とも密に連携することとなる。週に1回の症例検討会では新規受け持ち症例のプレゼンテーションを行い、診断、治療方針などを発表し、質疑応答することにより知識、経験を積む。また年に1回程度は日本精神神経学会や関連学会へ参加することを促す。自身の経験した希少かつ特異な症例がある場合などは積極的に自身で学会発表することを推奨している。
	学問的姿勢	専攻医は現代医学の進歩に遅れることなく自己研鑽することが求められる。一般的な臨床精神医学書籍で学習することは勿論であるが、臨床現場で遭遇する様々な疑問に関しても、文献検索して解決するように努める。月に2回の抄読会は、EBMに即してそれらの臨床的な疑問点を解決する構造となっており、その手法などについて学んで欲しい。文献のみでは解決しない疑問点に対しては、自ら臨床研究や基礎研究を行う積極的な姿勢が要求される。それら研究で一定の成果が得られた場合は、結果を整理し、学術集会などで発表することを推奨する。

	医師に必要なコアコンピテンシー、倫理性、社会性	日本精神神経学会や関連学会の学術集会や各種研修会、セミナー等に参加して医療安全、感染管理、医療倫理、医師として身につけるべき態度などについて履修・学習し、医師としての基本的診察能力（コアコンピテンシー）を高める機会をもうける。日々の臨床現場で様々な入院形態、行動制限などを経験し、法と医学の関係性について学んでいく。各種診断書、証明書、死亡診断書など各種書類に関して、法的意味を理解しながら記載できるようにする。人権、接遇、医療倫理に関する勉強会などに専攻医も参加し、医師としての責任、チーム医療の実践の在り方などを理解する。協力病院を含め、大学医学部学生、初期研修医なども受け入れている。そのため良き先輩として模範となるよう自ら診療技術を磨き、後輩の教育・指導も行う。
施設群による研修プログラムと地域医療についての考え方	年次毎の研修計画	〈1年目〉藍野花園病院での研修を予定している。指導医とともに患者を受け持ち、診断と治療計画、薬物療法および精神療法の基本を学び、精神科医としての基本的な倫理観を養う。また患者本人のみならず家族・支援者との面接方法を学び適切な治療関係を維持する技術・態度を身につける。さらに面接時に必要な情報を的確に抽出し、適切な診断や治療に繋げる技術を習得する。各種検査、心理検査の解釈、画像検査の読影を学び、診断や治療に活用するスキルを学ぶ。早い段階から入院受け入れ業務を担当し、入院形態に関わらず受け持つことで、精神保健福祉法などの法律への理解と人権への配慮を学習する。特に措置入院に関しては、精神科急性期医療に必要な法律の知識、対応方法などを学ぶ。外来業務では最初の数か月は指導医の診察等に陪席することで、面接技法や患者との関係性の構築方法を学び、その後は指導医の管理のもとでそれを実践する。また往診や訪問診療などを通じて、退院支援や社会生活支援の在り方を学習する。他には、症例検討会、抄読会に参加し、臨床及び基礎的な精神医学への関心を高め、リサーチマインドを涵養する。〈2年目〉藍野病院にて研修を行う。総合病院である特徴を生かし、他科と協働してリエゾン・コンサルテーション精神医学、身体合併症症例を主に経験・学習する。それと並行して、指導医の指導を受けつつ、自立して、面接技法、診断・治療計画、薬物療法、精神療法などの技法をさらに向上させる。引き続き、院内抄読会、症例検討会などで発表・討論することでリサーチマインドを維持し、機会があれば学会発表などを行う。認知症治療にも力を入れており、認知症の鑑別・診断・治療が適切に行えるように学習する。〈3年目〉専攻医の希望にて「総合病院である藍野病院：Aコース」「単科精神病院である藍野花園病院：Bコース」「その中間的な位置づけの青葉丘病院：Cコース」を選び研修できる形にする。過去2年間の経験を生かして主導的に精神科医療を実践、経験することとなる。この時期には指導医から自立して診療できるようにすることが目標となる。指導医のスーパーバイズを受けながら、単独で入院患者、外来患者の主治医となり、責任を持った医療を実行する能力を養うこととなる。
	研修施設群と研修プログラム	「藍野病院連携プログラム専門研修プログラム」・医療法人恒昭会藍野病院（基幹病院）・医療法人恒昭会藍野花園病院（協力病院）・医療法人恒昭会青葉丘病院（協力病院）
	地域医療について	基幹病院である藍野病院、協力病院である藍野花園病院は大阪府北摂地域（大阪府北東部）における中核精神科医療施設であり、両病院ともに地域に密着した症例を経験可能である。また両病院では往診、訪問診療なども行っており、「あいの訪問看護ステーション」「デイケアセンター」を併設しているため、地域社会での精神科医療の在り方を学習できる。一方、協力病院である青葉丘病院は大阪府南東部に位置する大阪狭山市に所在する。田園風景と住宅地が混在し、狭山ニュータウンなどの大規模住宅開発地域を有する場所柄である。いずれの地域で研修することとなっても、保健所をはじめとする行政や地域の医療福祉関係者を交えての退院支援やカンファレンスが行われ、必然的に地域医療に関わることとなる。
専門研修の評価		3か月ごとに、カリキュラムに基づいたプログラムの進行状況を専攻医と指導医が確認し、その後の研修方法を定め、研修プログラム管理委員会に提出する。また、各施設の担当指導医が各専攻医の研修目標の達成度を6か月ごとに評価し、フィードバックする。一年後に一年間のプログラム進行状況及び研修目標の達成度を指導責任者が確認し、次年度の研修計画を作成する。またその結果を統括責任者に報告・提出する。それら専攻医の研修実績および評価には研修記録簿システムを用いる。
修了判定		年に1回の研修プログラム管理委員会において、知識、技能、態度などについて振り返りと評価を重ねた上で、3年経過時に総合的に修了を判定する。
	専門研修プログラムの管理委員会の業務	研修プログラムの作成やプログラム施行上の問題点の検討や評価を行う。また専攻医の統括的な管理（専攻医の採用、研修中断、研修計画や進行状況の管理、必要な環境整備など）や評価を行う。
	専攻医の就業環境	1～3年目、すべての期間で週5日勤務を基本とする。就業時間は9：00～17：00（休憩60分）とする。各施設の就業規則に基づき、休日、有給休暇を与える。3年目以降で専攻医が希望すれば、週32時間以上をベースに調整可能。学会などへの出張に関わる交通費・宿泊費等については研修中の施設規定による。

専門研修管理委員会	専門研修プログラムの改善	研修施設群内における連携会議を定期的に開催し、研修プログラムの問題点を抽出し、改善策を検討する。専攻医からのプログラムに対する意見や評価も連携会議で討議する。年に1度の専門研修プログラム委員会にて、年度ごとの専攻医の学習状況、達成度などについて評価・振り返りを行うとともに、連携会議での会議内容を踏まえて、次年度のプログラムに修正を反映する。
	専攻医の採用と修了	専門研修プログラム管理委員会にて、採用及び終了の評価を行う。基本、専攻医の採用は年に2名程度（最大3名まで）と考えている。
	研修の休止・中断、プログラム移動、プログラム外研修の条件	個別の相談を受けての対応となる。専門研修プログラム管理委員会の決定あるいはプログラム統括責任者の決定を経て「可能」と考える。
	研修に対するサイトビジット（訪問調査）	専門研修管理委員には規定に則して医師以外のメディカルスタッフも配置しており、必要時には第三者の参加を要請したり、第三者の参加を認めることとする。日本精神神経学会によるサイドビジットに対しては適宜受け入れを行い、研修プログラム統括責任者、研修指導責任者、研修指導医の一部、すべての専攻医が対応することとする。
専門研修指導医 最大で10名までにしてください。 主な情報として医師名、所属、 役職を記述してください。	藍野病院：円谷 邦泰（精神科副部長）、寒川 尚登、中尾 千夏、 藍野花園病院：清水 信夫（院長）、義本 圭（診療部長、医局長）、東 徹（医療社会事業部部長）、林 有希（精神科医長）、比嘉 祐子、大石 基、青葉丘病院：杉本 美和	
Subspecialty領域との連続性	藍野病院：日本認知症学会教育施設、日本老年精神医学会専門医制度認定施設。青葉丘病院：日本老年精神医学会専門医制度認定施設。	